

J・R・R Tolkien 「水の辺村の合戦」再考察 — 悪の観点から

島 居 佳 江

1. はじめに

J・R・R Tolkien の *The Lord of the Rings* 『指輪物語』には多くの戦いの場面がある。一つの指輪を巡る一連の戦いである War of the Ring（指輪戦争）の決着がついた後、指輪の破棄という使命を果たしたホビットたちは、恋焦がれた故郷、ホビット庄に帰還し、その後、The battle of Bywater（水の辺村の合戦）を戦う。これまで注目されることの少なかった水の辺村の合戦は、Sauron 対 9 人の旅の仲間たち、そして Saruman 対 ホビットという二つの対立を最終的に完結させる。二人の敵をテーマにした論は多い（Chance; Dickerson; Flieger; Shippey）が、そこに Gollum と Gríma の二人を絡めた論文は、既存の文献に比較的未開拓のようである。トールキンが描く「悪」は、しばしば「善」の墮落として描かれる。サウロンとサルマンは、本来「善」であったものが歪められて「巨大な敵」へと変貌を遂げた。その「巨大な敵」の破滅に最終的なとどめを刺すのが、ゴラムとグリマであるが、この二人の「悪」は必要悪の役割を担っている。水の辺村の合戦は『指輪物語』の最後を飾る戦いであるにもかかわらず、敵は最強のサウロンではなくサルマンである。トールキンが果敢に地上での現実的な悪や、凡庸な悪を描こうと挑んでいたことが、水の辺村の合戦に読み取れる。

2. トールキンが描く悪

『指輪物語』の中心的主題が「善と悪」または「悪の性質」だと指摘する批評家が多い（Auden; Clark; Purtill; Shippey; Treloar; Wood; 青木; 安藤）。

パーティルは『指輪物語』には、七大罪のうち「性欲」を除く全ての罪が描かれていると述べる(96)。オーデンは、善良なキャラクターは悪を想像することができるが、悪のキャラクターは善を想像することができないと言う(7)。シッピーは、悪を「ボエティウスの」と「マニ教的」の二重のヴィジョンであるという見解を示している(112-159)。「ボエティウスの」とは、ウッドが述べるアウグスティヌスの「悪は善の不在」とほぼ同義だが、ウッドが反駁する「マニ教的」とは、「悪は現実に存在する」というマニ教的二元論から取られている。青木は、悪を「外なる悪」と「内なる悪」に分けて考察し、トールキンが描く悪は「主人公とその味方が善であり、敵が悪というような単純な物語ではない」と、Boromir が指輪の力で悪へと引き摺り込まれる例を挙げている(53-55)。

『指輪物語』での墮落は「一つの指輪」によって誘発される。この「一つの指輪」(The One Ring)とは、冥王サウロンが鑄造した強力な魔力を秘めた指輪で、エルフ、ドワーフ、そして人間に与えられた他の指輪を支配する。「一つの指輪」を持つ者は、指輪を造ったサウロンの影響を免れることはできず、強い支配欲に取り憑かれ、道徳心を失っていく。「指輪の悪の本質は誘惑のみならず強制力である。指輪は意思を隷属させる」(70)と、ウッドは述べる。指輪は、指輪保持者を悪へと誘導するが、神の恩寵は、それから逃れる道を備える。ウッドも、トールキンに「神の恩寵はそれに対する私たちの正しい反応を可能にさせると主張するパウロやアウグスティヌスの受容が見られる」(70)と言う。トールキンが描く悪は、神の恩寵なしには救いもない。これは、近い時代の Joseph Henry Shorthouse(1834-1903) が代表作 *John Inglesant: A Romance* で描いた宗教文化、その中でも特に赦し、回心などとは一線を画する。

3. 二つの対立

『指輪物語』での、シンメトリーについては数多くの指摘がなされてきた。対になる例として、メリーとピピン、ローハンとゴンドール、セオデンとデ

ネソールなど枚挙に遑がないが、シッピーはそれに加え、構造に関わるシンメトリーを「それだけで読めば普通の描写だが、他の場面と比較するとそれぞれの描写が浮かび上がる手法」(51)だと解説する。本章でも、サウロンとサルマン、そしてゴラムとグリマのシンメトリーを比較して、水の辺村の合戦の重要性を浮かび上がらせる。

3-1 サウロンとサルマン

指輪物語の戦いの構造を考える際に、水の辺村の合戦の存在に疑問を抱く読者は多いだろう。指輪戦争が終わった後の場面としては、新しい展開も新たな驚きも特段にない。水の辺村の合戦の意義を鑑みるには『指輪物語』の要となる二人の敵と二つの対立を認識する必要がある。敵は、サウロンとサルマンである。サウロンに対する9人の旅の仲間たち、そしてサルマンに対するホビットという構図で、その二つの対立は、パラレルを成し、絡まり、ほどけつつ物語が進行していく。サウロンは悪の冥王で、最強と思われがちだが、サウロンが減びた後もサルマンは生き延びており、サルマンが完全にサウロンに従属した関係ではないことがわかる。

指輪戦争の敵である冥王サウロンは、ほぼ完全悪として描かれる。圧倒的な悪の力を持つサウロンは、幽鬼である黒の乗り手、オーク、トロルなどを支配、管理しており、サウロンに従属するキャラクターたちは、残虐さのみが強調され、読み手が共感する余地などほとんどない。『指輪物語』の前史に当たる *The Silmarillion* 『シルマリルの物語』で、サウロンは、初めは天使的種族だったが、誘惑され墮落し、“Sauron was become now a sorcerer of dreadful power, master of shadows and of phantoms, foul in wisdom, cruel in strength, misshaping what he touched, twisting what he ruled, lord of werewolves; his dominion was torment.”「サウロンは、今や恐るべき力を持つ呪術師、影と亡霊の支配者となっていた。邪悪な知恵と残忍な強さを持ち、触るものを不具にし、支配するものを捻じ曲げ、巨狼の主であった。彼の統治は拷問だった」(*The Silmarillion* 182)とあるように、残酷で残忍

なこと筆舌に尽くし難い存在と成り果てた。このサウロンを倒すためには、サウロン自身が鑄造した指輪を、それが造られた滅びの山の不滅の火に投げ込んで破棄するしか方法がない。ホビット4人、魔法使い1人、エルフ1人、ドワーフ1人、そして人間2人の合わせて9人が、旅の仲間として指輪の破棄という共通目的を掲げて旅にでる。途中、人間のボロミアは指輪の魔力に抗いきれずに変節し、命を落とす。他の旅の仲間たちも偶発的に離れ離れになり、複数の小グループに分かれるが、その置かれた場所で精一杯の戦いを繰り広げる。

しかしながら、最終的に指輪を滅びの山の裂け目に投げ入れたのは、これら旅の仲間9人ではなく、自らの欲望のみに生きたゴラムなのである。ゴラムは、指輪を見つけ、そしてこの指輪を落としてホビットの Bilbo（フロドの養父）に拾われるまで長らく所有していた。指輪がフロドの手に渡ってからも、再び自分のものにしようと、執拗につけ狙う。フロドが、指輪の意思に蹂躪され指輪の破棄を思いとどまったその時に、ゴラムはフロドの指を噛みちぎって指輪を奪い、指輪諸共に滅びの山の深い火の裂け目へと落ちて行く。

一方、サルマンは、灰色の Gandalf の上位である白の魔法使いとして登場し、サウロンの脅威に対抗すべく結成された白の会議の議長でもあったが、悪を研究するうちに、悪に魅入られ墮落していく。サルマンは、サウロンにとって代わり、中つ国支配を目指すようになり、居住地であるアイゼンガルドを要塞化し、軍事力を高める。しかし、森を守るエントや旅の仲間によって打ち破られ、白い魔法使いになったガンダルフに杖を折られる。ガンダルフは、サルマンの地位と力を剥奪するが、慈悲の心で降伏を勧め、救済を試みる。しかし、サルマンは傲慢と執着によってその機会を拒絶する。サウロンが滅ぼされた後、サルマンはアイゼンガルドを脱出し、かねてから手先を送り込んでいたホビット庄へ向かい、そこで復讐として、木々を切り倒し、ホビット庄を禍々しく荒廃させる。

指輪戦争で勝利したホビットたちは、仲間の一人である Aragorn の戴冠式と結婚式を見届け、旅の仲間と共に帰路に着く。旅のはじめに仲間が増え

ていったのとはちょうど逆に、ミッションをやり遂げた仲間は、1人、2人とそれぞれの道に戻っていき、残されたのはホビット4人だけになる。故郷に戻り、サルマンの悪事を知ることになるが、指輪戦争で経験を積み、著しい成長を遂げたホビットたちにとって、サルマンとその一味を討伐することは難無いことだった。サルマンを殺そうとするホビットたちを押しとどめ、許しを与えるフロドに対し、サルマンは隠し持っていたナイフで刺す。フロドは胴着のおかげで助かるが、殺されかけてもなお、サルマンに憐れみをかけ許す。その直後に、サルマンを殺害したのは、グリマである。グリマは、蛇の舌とも呼ばれ、もともとはローハン王の相談役だったが、サルマンに買収されて裏切り者となり、正体を暴かれて追放された後には、サルマンに奴隷のように付き従い、虐げられていた。グリマは、サルマンから自由になれると思った時に、サルマンによって昔の悪事を暴露されたため、サルマンに飛びかかって喉を掻き切り、それとほぼ同時にホビットによる矢に射られた。

3-2 ゴラムとグリマ

先に述べたように、これら二つの対立には共通点がある。最終的に敵にとどめを刺すのは、サウロンに対する9人の仲間ではなく、ゴラム。そしてサルマンに対するホビットではなく、グリマで、どちらも敵に対立する登場キャラクターたちは手を汚していない。対立を完結させたのは、対立者以外で、高い意外性と不確実性の上に成り立った終焉なのである。また、この二人が、敵に対立する登場キャラクターたちのヒーロー性と真逆の存在というのも興味をそそられる。ゴラムとグリマは、外見も内面も醜い、忌むべき存在として描かれている。

ゴラムとグリマは、最初から忌むべき存在だったわけではなく、騙しと裏切りを重ね、墮落を深めていくうちに、外見が醜悪に変容していく。その上、二人とも殺しにまで手を染めている。この抹殺されて然るべき二人が、命を助けられ、後に重要な役割を果たすことになる。旅に出る前に、フロドが、

ゴラムに対してなんら哀れみを感じることができない、ゴラムは死に値すると Gandalf に話す場面がある。そこで、Gandalf は、以下のように答える。

‘Deserve it (death)! I daresay he does. Many that live deserve death. And some that die deserve life. Can you give it to them? Then do not be too eager to deal out death in judgement. For even the very wise cannot see all ends. I have not much hope that Gollum can be cured before he dies, but there is a chance of it. And he is bound up with the fate of the Ring. My heart tells me that he has some part to play yet, for good or ill, before the end; and when that comes, the pity of Bilbo may rule the fate of many – yours not least. In any case we did not kill him (Gollum): he is very old and very wretched.’ (59-60)

死に値するだと！恐らくそうだろう。生きている多くの者は死に値する。そして、死ぬ者に生きる価値がある者がおる。おまえはそのような者に命を与えられるのか？できないのなら、そう熱心に死の判決を下すものではない。優れた賢者でさえ、最後の最後まで見通すことはできぬ。ゴラムが、生きている間に矯正されるとの甘い希望は持っておらんが、その可能性はある。そして彼は、指輪の運命に結び付けられておる。わしの心が言うのだ、彼は善にしろ悪にしろ、死ぬまでにやる役割がある。そして、その時が来れば、ビルボの情は多くの運命を左右するかもしれない、少なくともお前の運命をな。ともかく、われらはゴラムを殺さなかった。彼はひどく年老いて、惨めだった。

ゴラムが指輪の運命に結び付けられており、善にしろ悪にしろ、果たすべき役割があると Gandalf が言うのは、物語の伏線となっている。また、コリントⅡ 5 章 10 節の「私たちはみな、キリストのさばきの座に現れて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです」を土台にしているとも言える。トールキンは、贖いの必要

を認めるカトリック信者だった。全ての生物は、神の創造物ゆえに、悪から回復する希望がある。グリマもゴラムと同様に、ガンダルフから憐れみをかけられる場面がある。

I do not lie. See, Théoden, here is a snake(Gríma)! With safety you cannot take it(Gríma)with you, nor can you leave it behind. To slay it would be just. But it was not always as it now is. Once it was a man, and did you service in its fashion. Give him a horse and let him go at once, wherever he chooses.(520)

私は、嘘は言わぬ。見よ、セオデン、ここに蛇（グリマ）がおる！安全のためには、これを連れて行くことも、置き去りにすることもできぬ。殺すのが正しかろう。だが、これもかつては今のようではなかった。かつては人間であり、それなりに殿に仕えていたのだ。馬を与え、すぐに好きのところへ行かせよ。

グリマはこのように、ガンダルフのみならず、ローハン王セオデンからも許されて、追放されるが、人々が後退りをするほどの敵意を漲らせ、齒を剥き出し、シューと音を立てて、王の足元に唾を吐きかける。ゴラムもグリマも、ただ恩に仇する態度をとるだけで、感謝の念などは微塵もない。

3-3 サウロンとサルマンの最期

ゴラムとグリマが、サウロンとサルマンを滅亡させた時、サウロンとサルマンは、煙のような状態になって、風に吹かれて消えてしまう。まずは、指輪が投げ込まれ、探索の旅が成就した時をみてみよう。

it seemed to them that, black against the pall of cloud, there rose a huge shape of shadow, impenetrable, lightning-crowned, filling all the sky. Enormous it reared above the world, and stretched out towards

them a vast threatening hand, terrible but impotent: for even as it leaned over them, a great wind took it, and was all blown away, and passed; and then a hush fell.(949)

彼らには、雲の幕を背にして黒く、巨大な影の形が立ち昇るのが見えたようだった。それは、光を通さず、稲妻の冠を戴き、空を覆い尽くしていた。途方もなく大きなそれは世界の上にそびえ立ち、巨大な脅威の手を彼らへと伸ばした。恐るべき存在であったが、しかし無力だった。というのも、それが彼らの上に覆いかぶさろうとしたその瞬間、大風がそれを捉え、影はすべて吹き払われ、消え去った。そして、静寂が訪れた。

サウロンは『指輪物語』において、実在を現すことはなかった。ただ、目とその存在で、キャラクターたちの心をコントロールし、支配していった。そして、消滅の時、大地が揺れ動き、塔はぐらつき倒壊し、城壁は崩れ、振動が轟き、破壊の音で満たされ、滅びの山には火の川が流れる。滅亡と崩壊の中で、サウロンは最後まで姿を見せることはなく、雲のとぼりの大きな人影が吹き飛ばされることで、サウロンの消滅が示唆される。上の引用場面の静けさの後、サウロン側の勢力は、風に飛ぶ埃のように四散する。サウロンが造った生きものは全て、正気を失い、あちこちに逃げ惑い、ある者は自ら死を選び、またある者は望みのない場所に逃げ戻る。しかし、サルマンは、これらに当てはまらず逃げ延び、水の辺村の合戦の後、いたぶり従わせていたグリマに殺害される。サルマンが死んだとき、その亡骸は一気に萎びた。そして以下のように、サウロン同様、煙が現れ、風に吹かれて消滅する。

About the body of Saruman a grey mist gathered, and rising slowly to a great height like smoke from a fire, as a pale shrouded figure it loomed over the Hill. For a moment it wavered, looking to the West; but out of the West came a cold wind, and it bent away, and with a sigh dissolved nothing.(1020)

サルマンの亡骸の上に灰色の霧が集まり、ゆっくりと炎の煙のように高

く昇っていった。やがて、それは朧に覆われた姿となり、丘の上に不気味にそびえ立った。一瞬、その影はためらうように西の方を見つめた。しかし、西から冷たい風が吹きつけると、それは押し流され、ため息のような音を立てて無へと消え去った。

ゴラムとグリマは、上述してきたようにパラレル要素が多く、皮肉にもサルマンが語る ‘One ill deserves another.’ (1018) (一つの悪はもう一つの悪を受けるに値する) を体现する「必要悪」としての役割をも担っている。これはライトモチーフにもなっており、ガンダルフの ‘a traitor may betray himself and do good that he does not intend.’ 「裏切り者は、自らを裏切ること、意図せぬ善をなすこともある」 (815) や、サムの父親の ‘It’s an ill wind as blows nobody no good, as I always say.’ 「わしはいつも言っているが、どんな風でもまったく誰の得にもならないということはない」 (1022) など、「悪が意図せず、良い結果をもたらす」を意味する発言が散見される。悪であるゴラムとグリマも意図せず「巨大な敵」を倒した。

4. 水の辺村の合戦

サウロンとサルマンは双方「巨大な敵」だが、明らかにサウロンの方が格上である。サウロンは天使から墮落した存在なのに対し、サルマンは指導者の立場とはいえ魔法使いに過ぎないからである。その力が劣る方のサルマンが残り、最後の戦いである水の辺村の合戦を戦うのは、トールキンが指輪による墮落だけではなく、地上の悪を描くことにも力を注いだからだ。

4-1 普遍的な悪に対峙する人間

サルマン対ホビットの対決は、トールキンが、サウロン対9人の旅の仲間の対決に付け足した付録では決してない。1966年、新版が出た折に、トールキンは、水の辺村の合戦は重要な部分だと序文に書き残している。

It has been supposed by some that 'The Scouring of the Shire' reflects the situation in England at the time when I was finishing my tale. It does not. It is an essential part of the plot, foreseen from the outset, though in the event modified by the character of Saruman as developed in the story without, need I say, any allegorical significance or contemporary political reference whatsoever. (xxii)

「ホビット庄の掃蕩」は、私が物語を完成させた当時のイングランドの状況を反映していると考える者もいるようだが、そうではない。これは物語の本質的な一部であり、最初から構想されていたものだ。ただし、物語の中で発展したサルマンの性格によって最終的に修正された。言うまでもないことだが、そこには寓意的な意味も、当時の政治状況への言及も一切ない。

トールキンは、水の辺村の合戦へ当時のイギリスの状況、つまり第二次世界大戦の影響を否定し、執筆に着手した当初から構想に入っていたと明言している。また、しばしばトールキンは、自分はホビットだと述べている。

Tolkien himself was well aware of the similarity between creator and creation. 'I am in fact a hobbit,' he once wrote, 'in all but size. I like gardens, trees, and unmechanized farmlands; I smoke a pipe, and like good plain food (unrefrigerated), but detest French cooking; I like, and even dare to wear in these dull days, ornamental waistcoats. I am fond of mushrooms (out of a field); have a very simple sense of humour (which even my appreciative critics find tiresome); I go to bed late and get up late (when possible). I do not travel much.' (233)

トールキン自身、創造者（自分）と創造物（ホビット）の類似性をよく理解していた。彼はかつてこう書いている。「私は実のところ、体の大きさを除けばホビットそのものだ。庭や木々、そして機械化されていない農地が好きだ。パイプをふかし、素朴で美味しい食事（冷蔵されてい

ないもの)を好むが、フランス料理は大嫌いだ。この退屈な時代にあっても、私は装飾のついたチョッキを好み、さらにはそれを着る勇気すら持っている。野生のキノコが大好きで、極めて単純なユーモアのセンスを持っている(私のありがたい批評家でさえ、うんざりするほどだ)。夜更かしをし、できることなら朝は遅くまで寝ていたい。旅行にはあまり出かけない。

つまり、トールキンにとって、サルマン対ホビットの対決は、現実の悪に対する人間なのである。それに対して、サウロン対9人の旅の仲間の対決は、ファンタジーの世界で繰り広げられる冒険で、サウロンのように実体がない分、想像力でその世界は無限の広がりを見せる。サウロンは滅ぼされたが、サルマンの子孫はどこにでも見受けられると、ある書店が主催した「ホビット晩餐会」で、トールキンがスピーチをしている。

The main event was a 'Hobbit Dinner' organised by a Rotterdam bookseller, at which Tolkien made a lively speech in English interspersed with Dutch and Elvish. It was in part a parody of Bilbo's party speech at the beginning of *The Lord of the Rings*, and it concluded with Tolkien recalling 'that it is now exactly twenty years since I began in earnest to complete the history of our revered hobbit-ancestors of the Third Age. I look East, West, North, South, and I do not see Sauron; but I see that Saruman has many descendants. We Hobbits have against them no magic weapons. Yet, my gentlehobbits, I give you this toast: To the Hobbits, May they outlast the Sarumans and see spring again in the trees.' (300)

メインイベントは、ロッテルダムの書店が主催した「ホビット晩餐会」で、そこでトールキンは英語にオランダ語やエルフ語を交えた活気あふれるスピーチを行った。それは『指輪物語』の冒頭、ビルボのパーティでのスピーチのパロディでもあり、最後にトールキンは次のように語っ

た。「私が第三紀の敬愛すべきホビットの祖先たちの歴史を完成させようと本気で初めてから、ちょうど二十年が経ちました。私は東、西、北、南を見渡しますが、サウロンは見えません。しかし、サルマンの子孫は数多くいるのが見えます。我々ホビットは、彼らに対抗する魔法の武器を持ちません。しかし、優しいホビットの皆さん、私はここで乾杯を捧げます。ホビットたちに！サルマンたちよりも長く生き、木々に再び春の訪れを見ることができますように」。

トールキンは、サルマン対ホビットの対決を、この地上での普遍的な悪と対峙する不屈の人間に置き換え、より現実的な悪を描いてみせる。

4-2 現実的な悪

サルマン対ホビットの対決が、この地上での悪に対する人の戦いだとするならば、もはや魔法は使われず、武器も現実的になるのは道理に適っている。サルマンが、アイゼンガルドを砦として、指輪戦争でサウロンの片棒を担いでいた頃、サルマンは人間やオークからなる軍勢を所有していた。オークは醜く恐ろしい風貌で、牙や鉤爪を持つ。太陽の光を忌み嫌い、その下では疲弊する。さらにサルマンは、自分の軍のために、太陽に影響を受けないウルク＝ハイという改良型戦闘用オークを作り出す。ウルク＝ハイは、サルマンによって妖術で掛け合わされた存在だとか、人の肉を食べるなどと噂された。サルマンは、サウロン対9人の旅の仲間の対決に加担しているときは、このようにファンタジー要素が強い攻撃を繰り広げるが、サルマン対ホビットの対決には、オークもウルク＝ハイも登場しない。水の辺村の合戦で、サルマンは手下である人間のごろつきを送り込むのみである。

しかし地味な登場キャラクターながら、水の辺村の合戦において、地上の悪は実にリアリティを伴って描かれる。サルマンは、ホビットを墮落させるために、ホビットの弱い部分に付け込み、その欲望を引き出して成功する。チーフと呼ばれるロソ・サックビル＝バギンズは、父親から引き継いだパイ

ブ草農園を所有しており、サルマンの手下の人間とパイプ草の取引をしていた。その取引で得た利益で、ホビット庄を次々と買収し、事業を拡大する。その生産物の大部分は、当時サルマンが戦いの準備をしていたアイゼンガルドに秘密裏に輸出されていた。ロソは、その母であるロベリアと共に、ホビットの中ではトラブルメーカーで嫌われ者であった。フロド・バギンズの血縁者であるにもかかわらず、サルマンと手を組むロソは、悪が身内の中でも行われ得ることを例示する。全てのホビットが善良なわけではないし、このような厄介者の親戚はどこででも聞く話である。また、ロソは、産業主義、物質主義を体現し、他のホビットたちの物資を調達という名目で取り上げる。ロソは、もともと親から譲られた財産をふんだんに持っていたにもかかわらず、何もかも独り占めしようとして、サンディマンの製粉所までも買収する。欲は留まるところを知らず、ついに製粉所は元々の目的を失い、珍妙な機械が入り、騒音と悪臭、汚水を流し込んでは川を汚染するようになる。ロソの世俗的欲望を利用し、サルマンがホビット庄をさらに工業化し、蹂躪していく。サルマンはアイゼンガルドでも木々を伐り倒し、エントたちの激しい怒りをかった。この産業革命を想起させる自然破壊も、トールキンにとっては地上での悪の一つである。ロソは最終的に用済みになり、サルマンの指示でグリマによって刺し殺される。水の辺村の合戦では、サルマン対ホビットの対決が、ホビット側の完全勝利で終わるが、ホビットの中にも悪が蔓延り得ることが描かれる。

4-3 凡庸な悪

これまで注目されることの少なかった水の辺村の合戦の中でも、ほとんど論じられてこなかったホビット庄警察の悪について提言したい。ホビット庄警察も製粉所同様、本来の目的を失っている。ホビット庄にやって来たごろつきにより、庄警察長でもある庄長のウィルが投獄され、翌年、ごろつきの勢力を背景にロソが「庄警察チーフ」(Chief Shirriff) または「チーフ」(Chief) を名乗り、庄警察を支配の道具として利用し始めた。庄警察は拡大し、各地

に庄警察署（Shirriff-house）が建てられて隊が駐在し、チーフの決めた様々な「規則」に違反する者を取り締まるようになった。チーフは、いつしかサルマンにとって代わられる。庄警察隊のホビットの大部分はやむを得ず働いているが、中には権力を笠に着たり、チーフやごろつきに取り入るために彼らの密偵となる者もいた。

‘But you can give it up, stop Shirriffing, if it has stopped being a respectable job,’ said Sam.

‘We’re not allowed to,’ said Robin.

‘If I hear *not allowed* much oftener,’ said Sam, ‘I’m going to get angry.’(1002)

「でも、おまえだって辞めることはできるだろう。庄警察の仕事がもうまともな職じゃなくなったんならな」とサムは言った。

「辞めることは許されてないんだよ」とロビンは言った。

「“許されてない”なんて言葉をこれ以上聞くことになったら、オレは怒るぞ」とサムは言った。

庄警察の署員であるロビンは、許可なくしては行動できない状況と規則を破った場合の処罰や制裁を眩く。庄警察署員は、もはや自分で考えることを放棄し、チーフに命じられたことのみに専心するようになっている。庄警察署員は、自分では全く意図せずに、チーフの悪の実行犯となっており、これは「凡庸な悪」と呼んで差し支えないだろう。「悪の凡庸さ」（the banality of evil）は、Hannah Arendt が、著書 *Eichmann in Jerusalem: A Report on the Banality of Evil* の中で提唱した概念である。アーレントは、ナチス戦犯アドルフ・アイヒマンの裁判を取材して、悪は個人の選択ではなく、組織の中で生まれることもあると考察している。頭が特別良くも悪くもない普通の男のアドルフ・アイヒマンは、多くのユダヤ人をガス室へと送った。彼は、ただ命じられた任務を淡々とこなし、結果を想像することはなかった。「悪の凡庸さ」は、悪がしばしば極端な悪意ではなく、思考停止や盲目的な服従

によって行われることを示し、まさにホビット庄警察の署員たちの姿を言い当てる。また、実際戦争時に、このような凡庸な悪の機構に加わる人間が多く存在していたことは歴史が示す通りである。水の辺村の合戦には、指輪もオークも現れない。地上の悪と戦う人間が描かれるが、その人間もまた容易く悪に堕ちる可能性が内包されている。

5. おわりに

これまで注目されることの少なかった水の辺村の合戦に、その意義を求めて考察を重ねた。水の辺村の合戦は、二つの対立の構造上、非常に重要な位置を占めている。二つの対立は、サウロン対9人の旅の仲間たち、そしてサルマン対ホビットで、後者の対立を完結させるのが、水の辺村の合戦である。「巨大な敵」を代表するサウロンとサルマンだが、サウロンが実体を持たず、キャラクターの意思を蹂躪して墮落させるのに対して、サルマンは地上での現実的な悪事をも行う。ゴラムとグリマは、必要悪として「巨大な敵」を消し去った。「巨大な敵」であるサウロンとサルマンには、神の恩寵の介入が全く見られず、全ては無となり消え去る。サルマン対ホビットの対決は、この地上の普遍的な悪に対峙する勇気ある人々として描写されている。水の辺村の合戦では、圧倒的な悪の力を持つサウロンよりも長らえたサルマンや、ホビットのロソが、今ここで起こり得る悪を行う。ホビットを守るはずのホビット庄警察が、悪を働く機関となったのは、個々の署員が考えることを止め、悪に追従したからである。トールキンは「巨大な敵」を倒すだけではなく、陳腐な人間の墮落をも水の辺村の合戦に書き込んでいる。

参考文献

- Arendt, Hannah. *Eichmann in Jerusalem: A Report on the Banality of Evil*. Penguin Publishing Group, 2006.
- Auden, W. H. "Good and Evil in *The Lord of the Rings*." *Tolkien Journal*, vol. 3, no. 1, 1967. pp. 5-8.
- Carpenter, Humphrey. *J. R. R. Tolkien: A Biography*. HarperCollins Publishers, 2011.
- Chance, Jane. *Tolkien's Art: A Mythology for England*. The University Press of Kentucky, 2001.
- Clark, Craig. "Problems of Good and Evil in Tolkien's *The Lord of the Rings*." *Mallorn: The Journal of the Tolkien Society*, no. 35, Tolkien Society, 1997. pp. 15-19.
- Dickerson, Matthew T.. *Following Gandalf: Epic Battles and Moral Victory in the Lord of the Rings*. Brazos Press, 2003.
- Flieger, Verlyn. *Splintered Light: Logos and Language in Tolkien's World*. The Kent State University Press, 2002.
- Pearce, Joseph. *Tolkien Man and Myth*. Harper Collins Publishers, 1998.
- Purtill, Richard. *J. R. R. Tolkien: Myth, Morality, and Religion*. Ignatius Press, 2013.
- Shippey, Tom. *J. R. R. Tolkien Author of the Century*. HarperCollins Publishers, 2000.
- . *The Road to Middle-earth: How J. R. R. Tolkien Created a New Mythology*. HarperCollins Publishers, 2003.
- Shorthouse, Joseph H. *John Inglesant: A Romance (1880)*. Kessinger Publishing, 2010.
- Tolkien, J. R. R. *The Hobbit*. A Del Rey Book, 1996.
- . *The Letters of J. R. R. Tolkien*. Edited by Humphrey Carpenter and Christopher, HarperCollins Publishers, 1981.
- . *The Lord of the Rings*. HarperCollins Publishers, 2005.
- . *The Silmarillion*. Edited by Christopher Tolkien, A Del Rey Book, 1977.
- Treloar, John L. "Tolkien and Christian Concepts of Evil: Apocalypse and Privation." *Mythlore*, vol. 15, no. 2 (56), Mythopoeic Society, 1988, pp. 57-60.
- Wood, Ralph C. *The Gospel According to Tolkien*. Westminster John Knox Press, 2003.
- . "Tolkien's Augustinian Understanding of Good and Evil: Why The Lord of the Rings Is Not Manichean." *Tree Of Tales Tolkien, Literature, and Theology*, edited by Trevor Hart and Ivan Khovacs, Baylor University Press, 2007, pp. 85-102.
- 青木由紀子. 「J・R・R・トールキン：神話作家と批評家たち」. 『指輪物語』. 成瀬俊一編. ミネルヴァ書房, 2007. pp. 51-62.
- 安藤聡. 「指輪の王と蠅の王」. 『指輪物語』. 成瀬俊一編. ミネルヴァ書房, 2007. pp. 24-29.
- 『聖書 新改訳』 日本聖書刊行会, 1995.